

東京通信

ねづのたこやきや

八木三男

天皇が死んだ日、わたくしは娘と根津銀座と呼ばれている片町商店街に通じる路地を歩いてた。雨もよいの暗い空のせいで、いつもより早めに路地は夜の闇につつまれていた。

一間半ほどの間口のガラスの欄間のうえに、日よけを兼ねた真っ赤な布ばりの看板が突き出ていた。「たこ焼きがんば」、「がんば」とはこの国の言葉だろう。変わった屋号だなと思つて店のなかをのぞくと、丸顔の若い細君が、路地に向きあって、鉄板に眼を落しながら、一心にたこ焼きをやっていた。

「醤油味下さい」

「はい、いらっしゃい」

細君がにこやかな顔をあげた。

「焼きたて下さい」と娘がいった。

「そいじゃ、ちょっとお待ち下さい。」

すぐできますから」

細君はまた眼を鉄板に落すと、たこ焼きの縁にくっつく滓をせわしげにそぎ落としながら、千枚通しで順ぐりに器用にひっくり返している。まだ醤油色に染まらないたこ焼きは、ほの赤いタコのかけらを表面に浮かべながら、妙に白く光るようにみえた。

「これは細君の顔だちにそっくりだ」

わたくしは細君の顔と、せわしく動く手の先を交互に見やりながら、感心していた。細君の顔だちというのが、まんまるの色白で、頬に少し赤みがさしているところなどは、そっくりたこ焼きだった。首すじから肩の線が豊かな胸もとにすつと落ちこんでいるから、なんとなく姿全体が太めのコケシ人形のようなのだ。

店のなかは昔の芝居小屋の棧敷のよ

うに、土間からあがる床には畳が敷いてあり、坐卓が二つ三つおいてあった。坐卓の脇で幼児が二人でじゃれ合っていた。幼い方はほんの今しがた小便でもさせてもらったのだろう、おちんちんをぶらさげたまま、パンツを手で丸めたりしていた。

さらに奥の棚の上のテレビがつけっ放しになっていて、天皇放送の戦争もののモノクロ写真が、見るひとがないままに、むなしく短かめのシークエンスで動いていた。

「天皇、天皇だね」とわたくしはいってみた。

「ほんと、ほんと」

細君は明るい笑顔のままキッとわたくしの方に顔をむけると、心もち訴えるような口調になった。

「ほんとに困ってるんですよ、子どもが退屈して。わたしは忙しいのに、どうにかなんないですかね」

「……」

「今晚はビデオ屋が大はやりでしょう

よ」

「なるほど」

細君はまた屈託のなさそうな笑顔に
もどった。

たて焼屋を出てからも、わたくしは
妙に感心していた。そうに違いない。
若者たちがあんな天皇潰けに我慢する
はずがない。自分ではビデオと無縁の
暮しだから思っていたらなかったのだ。

「普段でもビデオ屋の土曜日ははやる
のよ。そういうえば今晚の土曜日は大変
だろうな」娘が注釈をつけた。

中華料理の食堂にはいった。いつも
より店全体が落ちついた静けさのなか
にあった。腰を下してしばらくすると
となりの若いカップルの話が聞こえて
きた。

「これ葬式の音楽じゃない」

「ほんと」

男がはじめて気がついたようにいっ
た。実はわたくしもはじめて気がつい
たのだった。曲名は知るよしもなかつ
たが、レクイエムに違いなかった。

「これきつと有線だわ。有線もレクイ

エムしかないんだわ」

娘がいった。

この店はいつともは歌謡曲だった。だ
からもうひとつ品がなかったのだが、
今日は皮肉にも静かな音楽が店を落ち
つきのあるものになっているのだ。

中国人らしい若者がなん人も働いて
いる中国人経営の店なのである。ある
時五目焼そばを注文したら、「上海麵
一丁」などと調理場に告げる声があった。
ので、「上海麵ではない、五目焼そばだ」
などと不満を述べたことがあった。上
海麵も五目焼そばも中国流では同じも
のらしいのだ。いつもたどたどしい日
本語が店のなかを行き交っているのだ
ある。

娘のいうように、有線放送はレクイ
エムしか流していないのに違いない。
それは確信のようになった。だんだん
腹が立ってきた。天皇の名で惨禍をう
けた中国人が金を払って、レクイエム
とは何だ、曲種を選択できないとは何

ごとであるか。

帰りに八百屋の前を通ったら、やは
りレクイエムが流れていた。

根津界限では、弔旗の日の丸を掲げ
て、いた店は、根津銀座にはなにもなく
て不忍大通りの傘屋一軒きりだった。
普段と全く違わない街のにぎわいだっ
た。

かつて戊辰戦争のとき江戸が開城し
たあと、上野の山で彰義隊の戦争があ
ったが、そのとき江戸の町人たちは、
薬むしろに握り飯を携えて、上野の山
に見物にいったのだった。江戸市中で
は、彰義隊は朱鞘と足駄がけという恰
好よさで仲々の人気があったにも拘ら
ず、そこには幕府にも倒幕軍にも実際
には味方しない物見高い江戸の町人の
姿があった。そのなかに上野の山と地
続きのこの根津の住人の先祖たちもい
たのだろうか。いまの根津の住人の協
同を基盤とするパブリシティのなか
に、実際には天皇はどんな位置を占め
ているのだろうか。